

草平・らいてう年譜

| 年 | 森田米松（草平） | 平塚明（らいてう） |
|----------------|---|---|
| 1881〔明治14〕 | 岐阜県鷺山村の農家の長男として出生。 | |
| 1886〔明治19〕 | | 東京市麹町区三番町に平塚定二郎（会計検査院官吏。紀州藩士の子）、光沢（つや。田安家侍医の娘）の三女として出生。 |
| 1899〔明治32〕 | 金沢の第四高等学校に入学するも、従妹との同棲が発覚して退学。 | |
| 1903〔明治36〕 | 第一高等学校を卒業し、東京帝国大学英文科入学。 「犬吠崎」（『明星』3月）以下、短編小説を雑誌掲載。7月「仮寝姿」が『文芸倶楽部』懸賞短編小説一等となる。 | お茶の水高等女学校を卒業し、日本女子大学家政科に第三回生として入学。第一高等学校ドイツ語教師を兼務していた父定二郎が夏目漱石と同僚となる。 |
| 1905〔明治38〕 | 年末、『芸苑』掲載予定の短編小説「病葉」を漱石に読んでもらい、その後、師事する。 | 今北洪川『禅海一瀾』を見たのを機に日暮里「両忘庵」の釈宗活に参禅。修行を続ける。 |
| 1906〔明治39〕 | 東京帝国大学英文科卒業。 | 日本女子大学卒業後、英学塾、二松学舎に学ぶ。両忘庵では見性を認可されて「慧薫」の安名を受け、浅草の海禅寺で坂上真浄に参禅。 |
| 1907〔明治40〕 | 4月、天台宗中学校の英語教師となる。 6月、一高以来の友人生田長江と「閨秀文学会」を開設し講師となる。11月、生田・川下江村との共著『草雲雀』刊行にあたり、「草平」と号す。 | 早春、海禅寺で中原秀岳と接吻事件。成美女子英語学校に入学し、生田長江が6月そこに開設した研究会「閨秀文学会」に出席。秋には仲間との回覧雑誌に「愛の末日」を発表。 |
| 1908〔明治41〕 | 1月「愛の末日」批評の手紙を出したことから明との交際が進展。3月21日夜、出奔し雪深い塩原温泉郷奥の尾頭峠付近を明と二人で彷徨するところを警察に保護・連行される。事件後は漱石宅に寄宿し、明をめぐる議論。漱石は納得せずも「僕が書いて見せようか」と口にして、9月『三四郎』連載開始。横寺町正念寺に下宿して小説執筆。 | 森田との交際が情死未遂事件に発展。漱石から解決策として「結婚」の提示があり、さらに「事件の小説化を認めてほしい」との手紙に対し母が漱石を訪ねて中止を求めるも、押し切られる。日本女子大卒業生名簿から除名される。秋は信州に滞在し、森田から頻繁な手紙のほか『ヘッダ・ガブラー』が届く。 |
| 1909〔明治42〕 | 1～5月「東京朝日新聞」に『煤煙』を連載（「事実小説」と広告）。6月開始の漱石『それから』で言及を受ける。11月、同新聞に開設された「朝日文芸欄」の編集担当に。 | 日本禅学堂で中原全忠（南天棒）に参禅。夏、森田と偶然再会し旅館で語り明かす。中原秀岳と待合で「結ばれる」。12月、西宮海清寺で見性し、「全明」の安名を受ける。 |
| 1911〔明治44〕 | 4月、『自叙伝』（『煤煙』の後日談的小説）を「東京朝日」に連載し7月中断。10月「朝日文芸欄」廃止。『中央公論』12月号に短編「初恋」を発表。 | 9月、『青鞥』を創刊し、「らいてう」と号して「元始、女性は太陽であつた」を掲載。 |
| 1912〔明治45/大正1〕 | 6～8月、『十字街』を「読売新聞」に連載。 9月、短編集『初恋』を刊行。 | 『青鞥』4月号が発禁処分を受け、「五色の酒」「吉原登楼」などのゴシップで「新しい女」への非難が高まる。 |
| 1913〔大正2〕 | 引き続き短編小説を雑誌発表。翻訳にも着手。 | 『中央公論』1月号に「私は新しい女である」を発表。『青鞥』2月号発禁。4月号掲載の「世の婦人たちに」で警視庁から注意を受ける。5月刊行の『円窓より』が発禁となり、ただちに『肩（とざし）ある窓より』と改題して発行。 |

らいてう自ら語る"平塚明"

① それ以来、森田先生と私との間には世にも珍しい常識以前とも以上ともいえるような手紙——お互いに別々なかつてなことを考え、かつてな夢を描き、かつてな独り言をいっているような手紙が矢つぎ早に往復されました。誘われればどこへでもいっしょに歩き廻りました。木村さんを相棒に遊び歩くのとはまた別な興味とスリルがあったからでした。

しかし、これは永久に噛み合うことのない二つの歯車の急廻転のようなものだといえるでしょう。

(自伝『わたくしの歩いた道』, 1955)

② 私は自から神たらむとしてまづ神を殺した、そして神を見、神となつた。

けれどこゝに自白せねばならぬ。自分のこの緊張した生活に時として緩を生じ、この無尽蔵な真空の祭壇を空虚が生みつける色々の美しい偶像で汚す不純な、不透明な日のあるのを心から悲しんでみると。〔中略〕

四年前のこの夜、この時（三月二十一日午後十時十五分）私はこの円窓の自分の部屋を捨て、死ぬべく抜け出たのだ。〔中略〕何にせよ突差のことだつたから、いよゝ形体上の死を決行するといふことになる、私のやうな人との関係の極少ない者でもなかゝせねばならぬことが多かつた。〔中略〕さて総ての用事も片付いた後、家出前二時間の静坐、真に一切の所縁を放棄したあの二時間の快い静坐、あの心ゆく思はどうしても忘れられない。その後はあれだけ深い、あんな透徹した心境を味はうと思ふと並々ならぬ骨折りを要する。

私は何故殺されるのか、何故死ぬのか、そんなことはなんにも知らなかつた。また、知らうとも実は思はなかつた。

私はたゞ殺さうといふことに対してそれを避けやうとする念が全く動かなかつた。毎々殺すといふやうなことを聞かされてみた。始めからきかされてみた。が、いつでも私は死んでもいゝやうな気でみた。何故だか避けやうと思つたことは一度もなかつた。

何としても自分が殺される、自分が死ぬといふことは私には考へられないことなのだ。もう一度死んだ自分には、そして死から新たに生れた自分には死といふものがどうも考へられない。

考へられないといふよりも実は殆ど考へに上らなかつた。

(「円窓より」『青鞥』1912年4月)

③ 我が生涯のシステムを貫徹す、
我が cause によつて斃れしなり
他人の犯すところにあらず

(出奔時の書き置き→)

④ わたくしは両先生〔漱石・馬場孤蝶〕のご意見というものをきいて、腹が立つよりあきれ返ってしまいました。一体、森田先生はこんどのことをなんと思つているのだろう、これほど当事者を無視したものの考え方があるか、男と女の問題とさえいえば、結婚ですべて解決すると思つている世間の有象無象と全く同じじゃないか——。

⑤ 参禅をおえて、老師〔中原南天棒〕の前をさがろうとしたとき、不意に「あんたが駆け落ちしたというのはほんまか」ときかれました。「大船に乗ったから、もう大丈夫だな」という老師の慈愛の声をそのときききました。そのおことばに対して、わたくしは心のなかで、「それは違います、すでに大船に乗っていたからこそやったのです、あんな大馬鹿がなんのためらいも、おそれも、打算もなしにやれたのです」と反抗していたものです。

⑥ 「あなたが禅の影響で、あんな女ひとになつたとは僕は思えない、そうは思いたくない。あなたの異常性は生れつ計なのだ、それに僕は惹かれたのだ」「あなたにもドストエフスキーのようなテンカンの発作による精神の障害が



あるのではないか」とか「どうもあなたを見ているとモノマニアのようだ」などとも言われます。公案に全力集中している時の意識状態はまさにモノマニアでもあろう、なかなかよく観察しているなどは思いながら、口先では「モノマニアじゃありませんよ、エロマニアでしょう」などと、いたずらっ気をだしていいました。すると先生はにわかにか態度をかえ、「本当か？　それが本当ならあなたは超人だ。あなたのこれまでやつたことは超人的だ」といい、「あなたのためならどんなことでもできる、あなたの行くところならどこへでも僕はいく」とわたくしの手をつかんでせきこむようないい方をするかと思うと、次の瞬間には、また、「なぜ坐禅なんかするんです。したんです」と今度は咎めるような、怒っているようないい方をします。

「そんなこと簡単にいえません。」本能のような深い魂の要求になぜという理屈はない、女子大卒業前後のあの精神的な悩み、見神への強い願望、それから死線を超えた見性への精進、そのころの自分を思った瞬間、急霰のように涙がはらはらとこぼれてきました。（以上、『元始、女性は太陽であった』上、1971）

⑦ 私はかの「接吻」を思ふ。あらゆるものを情熱の坩堝に鎔す接吻を。接吻は実に「一」である。全霊よ、全肉よ、緊張の極の円かなる恍惚よ、安息よ、安息の美よ。感激の涙は金色の光に輝くであらう。
（「元始女性は太陽であった」『青鞥』1911年9月。『女性の言葉』〔1926〕削除部分）

⑧ 女の強味は単純にありやしないでせうかしら。女の尊さも。総ての美しさも。〔中略〕
然し、あのヘツダの深く押しへては居るが始終苛々として、どうかしなければ居ても立つても居られないといふ絶望の気持には私共は染々同情も出来ますね。なまじ此同情が有るのであの毒悪、無法な原稿焼の復讐だつてさう――咎める気にはなれません。〔中略〕忽ち身の破滅となるやうな行為を如何にも平気無雑作に、何の躊躇もなく済したものでやりのけて居ます あすこが面白いぢやありませんか。偉大な感じがしますよ。
（「ヘツダ・ガブラー合評」『青鞥』1911年10月）

⑨ 私は射かゝる光の目眩ゆさに眼を擦り――自分の身 体を見る、〔中略〕と、不思議なるかな。一面、純白な羽毛で蔽はれてゐる。つく――見れば雷鳥だ。〔中略〕
どうかと、まず一鼓翼して、さて大空へと飛んでみると、身体の軽さ、空 虚で出来てゐると云つてもまだ重い。
私は太陽の周 囲を三度廻つた。――
（「高原の秋」『青鞥』1911年11-12月）

⑩ ノラさん、私は自覚したあなたが、真の人間となつたあなたが、〔中略〕平然として「あなたは私です、私はあなたです。私の血はあなたの飲物にして下さい、私の肉はあなたの食物にして下さい」と言ひ放つ妻であり、母である日の来るのを信じて待つてみたいのです。
（「ノラさんに」『青鞥』1912年1月）

⑪ 『国民』に「所謂新しい女」が掲載されだした事はこの日からのことだつた。〔中略〕
私はあらゆるものを真面目に考へることの出来る紅吉を、新聞の記事の虚偽を以て満たされてゐるのを今更のやうに驚く紅吉を心に羨んだ。そして三、四年前の自分を目の前に見るやうな気がした。
（「円窓より」『青鞥』1912年8月）

⑫ 一物眼を遮るものなき虚堂、大虚堂。
もなかにたゞ隻眼あり。〔中略〕
「何をかも見たまふ」我れいくたびとなく問ひて総て甲斐なし。
はては端座して御眼の底に我が瞳を釘づけぬ。
かくていくひぞ。
曆日を越えれば知りがたし。
ひと日、我れ忽然として思ふ。
こは我がまなこに同じからずや。
否、我が眼、これならずや。
さなり、さなり、我がまなこ、まさしく我が眼にてありし。（初出不明。『円窓より』『肩 ある窓より』所

収)

[参考記事] <https://rhinoos.xyz/archives/19256.html>